〈新　刊　紹　介〉

瓦井裕子著『王朝和歌史の中の源氏物語』

本書は，平安時代の和歌史の中に『源氏物語』を置いたとき，同時代の和歌から同書がどう解釈できるか，また同書の享受が和歌史と交わる接点はどのようなものであったかを明らかにしようとしたものである。

本書の構成は次のとおりである。本書は全 2 部からなり，「はじめに」「凡例」に続く第一部「平安文学における類同表現とその解釈」では，平安文学に見られる類同表現との関連から『源氏物語』の新たな解釈を次の 6 章によって示す。「第一章　『源氏物語』の菊と紅葉――一条朝前後の好尚と表現史――」「第二章　『源氏物語』の〈風に吹かれる竹〉と同時代和歌」「第三章　六条御息所の弔問歌――さし置くという行為の意味するもの――」「第四章『源氏物語』幻巻と月次屏風の世界」「第五章　大中臣家重代歌人の表現踏襲――家集を用いた歌の学習と詠歌――」「第六章　『源氏物語』季節矛盾の再検討」。第二部「平安時代和歌から見る『源氏物語』受容の黎明」は，和歌において『源氏物語』摂取が行われるようになった最初期の様相を論じる次の 6 章からなる。「第一章　藤原妍子周辺女房の哀傷歌と『源氏物語』」「第二章　源師房歌合と『源氏物語』摂取の黎明」「第三章　禖子内親王家歌合における『源氏物語』摂取と源師房」「第四章　九月十三夜詠の誕生――端緒としての『源氏物語』摂取――」「第五章　「扇のつま」に歌を書きつける――『大鏡』の大斎院選子と『源氏物語』――」「第六章　『為信集』成立年代の再検討」。巻末に「初出一覧」「あとがき」「索引（一般事項索引，『源氏物語』事項索引，『源氏物語』主要景物索引，和歌索引）」を付す。（前田直子）

（2020 年 9 月 26 日発行，和泉書院刊，A5 判縦組み　290 頁　定価 9,350 円　ISBN 978-4-7576-0965-5）

園田博文著『日清戦争以前の日本語・中国語会話集』

本書は，現代語につながる日本語が形成される時期であり，かつ，資料上の一つの区切りでもある明治初期の中国語関係書，特に日本語が現れる日本語・中国語会話書を日本語学，日本語教育史に位置付け，考察することを目的とするものである。広部精著『亜細亜言語集』『総訳亜細亜言語集』，ならびに，福島九成著『参訂漢語問答篇国字解』を中心的な資料として取り上げている。

構成は以下のとおり。「まえがき」「凡例」「序章」「第 1 部　日本語の資料として」（「第 1 章　『問答篇』『語言自邇集』をもとにした『総訳亜細亜言語集』『参訂漢語問答篇国字解』の日本語」）「第 2 部　人称代名詞の有無と用法」（「第 2 章　明治前期から昭和前期までの中国語会話書 9 種における一・二人称代名詞の直訳度」「第 3 章　『総訳亜細亜言語集』における一・二人称代名詞」「第 4 章　『官話指南総訳』『東語士商叢談便覧』における一・二人称代名詞」）「第

3部　今につながる「です」のめばえ」（「第5章　『亜細亜言語集』『総訳亜細亜言語集』の文末における待遇表現」「第6章　明治前期中国語会話書9種における助動詞「です」の用法について」）「第4部　方言的要素の検討」（「第7章　『総訳亜細亜言語集』『参訂漢語問答篇国字解』『語学独案内』『沖縄対話』における「に」と「へ」」「第8章　『参訂漢語問答篇国字解』と九州方言語彙」「第9章　『参訂漢語問答篇国字解』における会話文中の語の解釈」）「終章」「中国語会話書一覧」。巻末に「参考文献」「あとがき」「索引」を付す。

なお，本書は著者が平成30年に東北大学大学院文学研究科に提出した博士学位請求論文『中国語会話書から見た近代日本語の研究』の前半部分に加筆・修正を加えたものであり，令和2年度同朋大学特定研究費（出版助成等）の助成を受けて刊行された。（田中佑）

（2020年10月5日発行　武蔵野書院刊　A5判横組み　148頁　定価1,320円　ISBN 978-4-8386-0735-8）

鄭惠先著『日本語人称詞の社会言語学的研究』

本書は，著者が2003年3月に大阪府立大学に提出した博士論文に加筆・修正を加えたものである。日本語の人称詞について社会言語学的観点から考察を行っている。

構成は以下のとおり。「まえがき」「序章　本研究の目的と先行研究」「第一部　日本語人称詞の通時的変遷と共時的相違」（「第1章　文学資料分析による日本語人称詞の通時的変遷」「第2章　意識調査結果による日本語人称詞の共時的相違」）「第二部　韓国語との対照から見た日本語人称詞」（「第3章　文学資料による日本語と韓国語の人称詞の対照」「第4章　意識調査による日本語と韓国語の人称詞の対照」）「第三部　人称詞の周辺形式としての複数形接尾辞」（「第5章　日本語の複数形接尾辞」「第6章　韓国語との対照から見た日本語複数形接尾辞」）「終章　結論と今後の課題」。巻末に「分析資料」「引用文献」「付録」「あとがき」を付す。（田中佑）

（2020年10月5日発行　日中言語文化出版社刊　A5判横組み　200頁　定価2,200円　ISBN 978-4-905013-64-8）

岸本秀樹著『Analyzing Japanese Syntax: A Generative Perspective』

英語で書かれた日本語統語論の入門書。生成文法における基本的な概念や，その日本語の統語分析への応用について解説する。それぞれの章タイトルにレベルや内容に関するカテゴリー記号が付されており，読者の興味に応じて読み分けられるように配慮されている。また，各章の終わりには理論的背景や関連トピックに関する簡潔な補足解説がある。自習にも使える練習問題がインターネット上に公開されている。

「Preface」「List of Abbreviations」に続く五部構成。「PART I　Theoretical Foundations」（「Chapter 1 Scientific Approach to Language」「Chapter 2 Rationalism versus Empiricism」「Chapter 3 Universal Grammar」「Chapter 4 Lexical and Functional Categories」）「PART II　In-

gredients of Clauses」（「Chapter 5 Syntax: The Core of Grammar」「Chapter 6 Generalizing Phrase Structures: X′-Theory」「Chapter 7 Reformulating Clause Structures」「Chapter 8 Thematic Roles」「Chapter 9 Passivization: Case and NP-movement」）「PART III　Nominal Structures」（「Chapter 10 Anaphors, Pronominals, and R-Expressions」「Chapter 11 Quantifier Scope」「Chapter 12 NP/DP and PP」）「PART IV　Hypotheses on Clause Structures」（「Chapter 13 Unaccusativity」「Chapter 14 Where Do Subjects Come From?」「Chapter 15 Control and Raising」「Chapter 16 Head Movement」「Chapter 17 Topics on Sentence-Initial Phrases」）「PART V　Grammatical Constructions」（「Chapter 18 Complex Predicates」「Chapter 19 Argument Extraction from DP」「Chapter 20 Non-Canonical Case Marking」「Chapter 21 Focusing on VP」）。末尾に「Bibliography」「Index」を付す。（阿久澤弘陽）

（2020 年 10 月 12 日発行　ひつじ書房刊　菊判横組み　228 頁　定価 2,860 円　ISBN 978-4-89476-988-5）

福井直樹・渡辺明監修『言語――フンボルト／チョムスキー／レネバーグ――』

本書は，それぞれの学史の人間の心に関する古典的名著を収めたシリーズ「〈名著精選〉心の謎から心の科学へ」の言語編である。チョムスキーの「書評　B・F・スキナー『言語行動』」の全訳を中心に，レネバーグおよびフンボルトの著作の抄訳が収録されている。

構成は次のとおり。「序文（福井直樹）」「イントロダクション（渡辺明）」「人間の言語構造の多様性と人類の精神的発展におよぼすその影響について（ヴィルヘルム・フォン・フンボルト著，遠藤健樹・佐藤駿訳）」「書評　B・F・スキナー『言語行動』（ノーム・チョムスキー著，梶浦真美訳）」「言語発達の生物学的理論を目指して（エリック・H・レネバーグ著，梶浦真美訳）」。末尾に「参考文献」「索引」を付す。（阿久澤弘陽）

（2020 年 10 月 16 日発行　岩波書店刊　四六判縦組み　254 頁　定価 3,300 円　ISBN 978-4-00-007800-9）

上野智子編『日本のことばシリーズ 39　高知県のことば』

本書は，全 48 巻「日本のことばシリーズ」（編集委員：平山輝男，大島一郎，大野眞男，久野眞，久野マリ子，杉村孝夫）の 30 冊目の発行となる。

本書の構成は次のとおりである。「はしがき」（平山輝男）に続き，「Ⅰ　総論」には「位置と方言区画」「方言意識」「方言の特色（1）」「方言の特色（2）（執筆者：久野眞）」「地方共通語」「方言景観・方言グッズ」がある。続く「Ⅱ　県内各地の方言」は次の 5 地域に分けて記述されている。「東言葉（土佐方言）　高知市／須崎市／奈半利町」「東言葉（土佐方言）の海岸部　東洋町」「東言葉（土佐方言）の山間部　本川／物部／東津野」「西言葉（幡多方言）　旧中村市／大月町」「西言葉（幡多方言）の山間部　旧十和村」。続いて「Ⅲ　方言基礎語彙（執筆者：篠木れい子。平山輝男他編『現代日本語方言大辞典』（明治書院）より再編集のうえ掲載）」，「Ⅳ　俚言（執筆者：岩城裕之）」，そして「Ⅴ　生活の中

のことば」には時代別に「江戸時代末，武市瑞山のことば」「昭和 10 年代（戦前），佐竹一男が記録した方言と習俗」「昭和・平成時代，池知つたえの歌」がある。巻末に「参考文献」「あとがき」を付す。（前田直子）

（2020 年 10 月 20 日発行，明治書院刊，A5 判横組み　214 頁　定価 7,700 円　ISBN978-4-625-62455-1）

加賀信広・西岡宣明・野村益寛・岡崎正男・岡田禎之・田中智之監修，西山國雄・長野明子著『形態論とレキシコン』

本書は，形態論研究の歴史を概観し，現在に至る経緯と背景を明らかにするとともに，今後の研究の動向に関わるトピックを解説するものである。多数様々な理論と立場が並存する現況へのマクロ的視点を提供することも意図されている。日英語の両方を扱っており，英語学・言語学の基礎的知識を修得した人を主な対象として書かれている。

構成は次のとおり。「第 1 章　形態論史概観」「第 2 章　英語の動詞由来派生名詞の諸問題」「第 3 章　日本語形態論の諸問題」「第 4 章　レキシコン」。末尾に「参考文献」「索引」「著者紹介」を付す。（阿久澤弘陽）

（2020 年 10 月 25 日発行　開拓社刊　A5 判横組み　256 頁　定価 3,850 円　ISBN 978-4-7589-1409-3）

金子勇著『ことわざ比較の文化社会学――日英仏の民衆知表現――』

本書は 110 のことわざを選択し，日本語・英語・フランス語の表現を併記・比較しつつ，現代社会学の視点から解釈し，論じたものである。ことわざに示される民衆知をこれからの日本「少子化する高齢化社会」に活かせるよう，現代的に再構築し読み解いている。

本書の構成は次の通りである。「はじめに」「凡例」「序　立体的な比較社会文化研究をめざして」に続き，ことわざが「1. 悪銭身に付かず」から「110. 論より証拠」まで五十音順に並ぶ。各ことわざには，3 か国語ともに同一（33%），二つの言語表現が同じ（26.4%），それぞれが独自の単語と表現であるもの（43.6%）のいずれであるかも記されている。巻末に「おわりに」「参照文献（ことわざ，辞典類，参考書籍）」を付す。（前田直子）

（2020 年 10 月 25 日発行，北海道大学出版会刊，四六判横組み　213 頁　定価 3,300 円　ISBN 978-4-8329-3409-2）

吉野政治著『明治元訳聖書成立攷』

本書は，名訳にして西洋文学の名作との誉高い大正改訳の文語訳聖書の土台となった明治元訳がどのように成立したかを明らかにしようとするものである。本書前篇の各論考は，文語訳聖書が漢訳聖書の書き下しに過ぎないという通説の誤りを証明しようとするものであり，後篇にはキリスト教用語として重要な「愛（あい）」「聖霊（せいれい）」「霊魂（たましひ）」「栄光（えいこう）」を

取り上げ，文語訳で用いられた訳語が後の日本語に与えた影響とキリスト教術語として確立していった過程を追った論考が収められている。

本書は「凡例」「まえがき」に続き，前篇と後篇からなる。「前篇　訳文の研究」の構成は次の通りである。「序章　ヘボン訳福音書の成立」は「I　ヘボンの翻訳法」「II　訳語と文体の特徴」「III　時刻名の改訂」，「第一章　委員会訳新約全書の成立」は「I　翻訳委員会での議論」「II　委員会訳福音書とヘボン訳」「III　福音書以外の書の翻訳法」，「第二章　委員会訳旧約全書の成立」は「I　『旧約全書』刊行までの経緯」「II　外国人による草稿の特徴」「III　日本人による草稿の特徴」「IV　日本人が完成まで関わった訳文の特徴」，「第三章　ヘボン訳「箴言」の初訳と改訳――委員会訳の用字・用語・文体――」からなる。「後篇 訳語の研究」は，「第一章 「愛」――「雅歌」の用例から――」，続く「第二章 「聖霊」と「霊魂」」は「I　プネゥマに対する訳語」「II　プシュケーに対する訳語」，「第三章 「栄光」」は「I　ヘボン訳における「栄光」の初出」「II　大正改訳における「栄光」の確立」「付論　奥野昌綱訳『真理易知（しんりいち）』について」からなる。巻末に「あとがき」「初出一覧」「索引（聖書，雑誌・新聞名，書名，人名）」を付す。（前田直子）

（2020 年 10 月 25 日発行　和泉書院刊　A5 判縦組み　566 頁　定価 12,100 円　ISBN 978-4-7576-0975-4）

薛静著『近代日本語教科書における謙譲表現』

本書は，近代の日本語教育における謙譲表現の教授に着目し，留学生教育の第一人者である松本亀次郎と留学生教育機関として中心的な存在であった宏文学院の日本語教師が編纂した会話・語法型・文典型・読本教科書における謙譲表現の特徴及び歴史的な変遷を明らかにするものである。

構成は次のとおり。「序章　研究の背景と先行研究」「第 1 部　近代中国人留学生教育について」（「第 1 章　近代中国人留学生教育について」）「第 2 部　松本亀次郎編纂の日本語教科書における謙譲表現」（「第 2 章　松本亀次郎編纂の会話教科書における謙譲表現」「第 3 章　松本亀次郎編纂の文典型教科書における謙譲表現」「第 4 章　松本亀次郎編纂の語法型教科書における謙譲表現」）「第 3 部　宏文学院の日本語教師編纂の日本語教科書における謙譲表現」（「第 5 章　宏文学院の日本語教師編纂の会話教科書における謙譲表現」「第 6 章　宏文学院の日本語教師編纂の文典型教科書における謙譲表現」）「第 4 部　近代読本教科書における謙譲表現」（「第 7 章　近代読本教科書における謙譲表現について――松本亀次郎と宏文学院の日本語教師編纂の教科書を中心に――」）「最終章　結論と今後の課題」。末尾に「参考文献」「謝辞」「著者紹介」を付す。（阿久澤弘陽）

（2020 年 10 月 31 日発行　郵研社刊　A5 判横組み　243 頁　定価 4,400 円　ISBN 978-4-907126-37-7）

川添愛著『ヒトの言葉　機械の言葉――「人工知能と話す」以前の言語学――』

本書は，機械が言葉を扱う能力を正しく評価するための基礎知識として，今の機械がどのように言葉を扱っているか，人間の言葉にどのような謎があるかを知るための入門書である。機械の言葉の現状，人間の言葉の特徴をめぐる様々な謎，そして機械の言葉との向き合い方について書かれている。

構成は次のとおり。「はじめに」「第一章　機械の言葉の現状」「第二章　言葉の意味とは何なのか」「第三章　文法と言語習得に関する謎」「第四章　コミュニケーションを可能にするもの」「第五章　機械の言葉とどう向き合うか」「おわりに」。末尾に「参考文献」を付す。（阿久澤弘陽）

（2020 年 11 月 10 日発行　KADOKAWA 刊　新書判縦組み　256 頁　定価 990 円　ISBN 978-4-04-082348-5）

今野真二著『言霊と日本語』

本書は，日本語・日本文化の中で「コトダマ」という語がどう使われ，「コトダマ」がどのようにとらえられてきたかをテーマに，「コトダマ」の使用の歴史，江戸時代における「コトダマ」という語と考え方との結びつきの展開，富士谷御杖のコトダマ観，詩的言語をよむという観点から見るコトダマについて書かれている。

構成は次のとおり。「はじめに」「第 1 章　『万葉集』の言霊」「第 2 章　江戸時代の言霊」「第 3 章　富士谷御杖の言霊倒語説」「第 4 章　和歌と言霊」。（阿久澤弘陽）

（2020 年 11 月 10 日発行　筑摩書房刊　新書判縦組み　256 頁　定価 924 円　ISBN 978-4-480-07350-1）

今野真二著『日本語ことばあそびの歴史』

本書は，2016 年 6 月に同社より刊行された『ことばあそびの歴史――日本語の迷宮への招待――』の文庫版である。ことばあそびの説明にとどまらず，現代日本語と結び付けたり，著者による新作を紹介したりと，ことばあそびの仕組みを面白く学べる工夫がなされている。

「はじめに」に続き，「第一章　ことばあそび事始め」「第二章　いろは歌あれこれ」「第三章　中世――なぞなぞの宝庫――」「第四章　江戸時代――言語遊戯百花繚乱――」「第五章　幕末・明治――雅俗をつなぐミッシング・リンク――」を収録。巻末に「参考文献」「おわりに」「文庫版あとがき」を付す。（田中佑）

（2020 年 11 月 10 日発行　河出書房新社刊　A6 判縦組み　352 頁　定価 1,210 円　ISBN 978-4-309-41780-6）

井出祥子・藤井洋子監修・編『場とことばの諸相』

地球上の人々のことばの実践を正しく捉え，人々が多様性を認めつつ共生できる道を模索するためには，西欧のものの見方をスタンダードとする考え方だけでは不十分であるという立場のもと，従来の研究におけることばの使用の原理・理論を補完する革新的

な原理・理論を構築する「シリーズ　文化と言語使用」の第2巻。

「シリーズ『文化と言語使用』刊行にあたって」「まえがき」に続き，「場の語用論——西欧モデルを補完するパラダイム——（井出祥子）」「場の語用論構築に向けて——場の哲学と実践理論からのアプローチ——（山口征孝）」「日本語の「場」志向性と述語主義を考える——英語との比較から——（藤井洋子）」「語りにおける声の共鳴——〈場所的領域〉にみるあいづち，薄い笑いと引き込み現象——（井出里咲子）」「フットボール実況中継の日英語比較——場の理論の観点から——（多々良直弘）」「同調から広がる会話の一体感——場の理論による解釈——（難波彩子）」「「場の語用論」からみた介護現場の言語使用——入浴介助におけるスピーチレベル・シフトと融合談話に着目して——（堀江薫・古田朋子）」「バーチャルな「場」における言語と身体——道案内データから考える——（片岡邦好）」「「場」の論理のハワイ語，ハワイ文化への応用——一次的な場と二次的な場およびそれらの普遍性の示唆——（スコット・サフト）」を収録。巻末に「索引」「執筆者紹介」を付す。（田中佑）

（2020年11月12日発行　ひつじ書房刊　A5判横組み　308頁　定価3,960円　ISBN 978-4-89476-792-8）

秦かおり・佐藤彰・岡本能里子編『メディアとことば5』

メディアとことばが相互にどのように絡み合いながら，現代社会のコミュニケーションを成立させているかを論じる『メディアとことば』の第5巻。特集のテーマは「政治とメディア」。

「はしがき」に続き，「第1部　現代メディア・SNS分析」に「ネット空間におけるヘイトスピーチ——その〈沈黙〉効果についての一考察——（辻大介）」「COLUMN　表現の自由（辻大介）」「トランプ大統領とメディアの〈フェイク〉戦争（遠藤薫）」「COLUMN　間メディア性（遠藤薫）」を，「第2部　マルチモーダル・映像メディア分析」「演説の多層的マルチモーダル分析——ドナルド・トランプ氏の集会演説に焦点を当てて——（片岡邦好）」「COLUMN　エスノポエティクス（民族詩学：エスノ詩学）（片岡邦好）」「中国・抗日作品のメディアミックスと日本人表象——『鶏毛信』を例に——（金水敏・劉翔）」「COLUMN　片言・ピジンと役割語（金水敏）」「オバマ広島訪問におけるメディア報道のマルチモード分析——プラハ演説「核なき世界」との比較を通した「記憶」の再文脈化——（岡本能里子）」「COLUMN　マルチリテラシーズの教育学（岡本能里子）」「結び直される広島の記憶——テレビドキュメンタリーにおける被爆2世・3世のナラティブ分析——（秦かおり）」「COLUMN　語り（ナラティブ）とジェスチャー（秦かおり）」を，「第3部　報道分析」に「原発事故を伝える米紙の和訳記事は「大本営発表」だったか——ウォール・ストリート・ジャーナル日本版における原発事故報道の批判的談話分析——（佐藤彰）」「COLUMN　ニュースの語りと個人的経験の語り（佐藤彰）」「メディア翻訳の政治性——フセイン元大統領は法廷で何を語ったのか——（坪井睦子）」「COLUMN　等価（坪井睦子）」「テロや戦争の報道で考える日本の国際報道の構造と言葉——「送り手」の視点からの考察——（五十嵐浩司）」「COLUMN　Attribution, Credit そして Byline（五十嵐

浩司）」を収録。巻末に「編者・執筆者紹介」を付す。（田中佑）

（2020 年 11 月 25 日発行　ひつじ書房刊　A5 判横組み　280 頁　定価 4,400 円　ISBN 978-4-89476-966-0）

李澤熊著『日本語の意味研究の新たな扉を開く――意味分析の方法と実際――』

本書は，現代日本語の様々な類義語と多義語の意味・用法を，認知言語学の観点から考察・記述したものである。類義語と多義語の日韓対照も行っており，日本語教育学における語彙研究への貢献も目指している。

構成は次のとおり。「はしがき」「本書における表記法」「第 1 章　はじめに」「第 2 章　意味分析の方法――理論的背景――」に続く三部構成。「第 I 部　類義語分析」（「第 3 章 「うっかり（と），うかうか（と），うかつに，うかつにも」の意味分析」「第 4 章 「どことなく，何となく，それとなく」の意味分析」「第 5 章 「いつしか，知らず知らず，いつの間にか」の意味分析」，「第 6 章 「たちまち，あっという間に，またたく間に」の意味分析」「第 7 章 「皆，すべて，全部」の意味分析」「第 8 章 「重なる，ダブる，かぶる」の意味分析」「第 9 章 「決める」と「定める」の意味分析」）「第 II 部　多義語分析」（「第 10 章 「正しい」の意味分析」「第 11 章 「かえす」の意味分析」「第 12 章 「のびる」の意味分析」「第 13 章 「どこ」の意味分析」）「第 III 部　日韓対照言語学的観点からの分析」（「第 14 章　韓国人日本語学習者のための日韓対照研究――多義語分析を中心に――」「第 15 章 「腐る」と「腐敗する」の意味分析――百科事典的意味観に基づく日韓対照研究――」「第 16 章　韓国語の副詞的成分「이따가（ittaga）」と「나중에（najunge）」の意味分析――日本語の「あとで」／「のちほど」との対照の観点から――」）。末尾に「引用文献」「本書で使用したコーパス及びツール」「索引」「初出一覧」を付す。（阿久澤弘陽）

（2020 年 11 月 28 日発行　開拓社刊　A5 判横組み　288 頁　定価 4,180 円　ISBN 978-4-7589-2293-7）

加賀信広・西岡宣明・野村益寛・岡崎正男・岡田禎之・田中智之監修，坪井栄治郎・早瀬尚子著『認知言語学（1）　認知文法と構文文法』

本書は，他の文法モデルとの対照を交えながら認知文法の枠組みを解説し，認知文法の近年の新たな展開について論じることに加えて，構文文法の展開，発展，修正と，その隣接領域への応用についても論じるものである。最新英語学・言語学シリーズの第 13 巻として刊行された。

「はしがき」に続く「第 I 部　認知文法」と「第 II 部　構文文法」の二部構成。第一部に，「第 1 章　はじめに」「第 2 章　機能主義言語学，認知言語学，認知文法と「認知」の意義」「第 3 章　認知文法の一般的な特徴」「第 4 章　象徴体系としての文法」「第 5 章　構文における「形式」」「第 6 章　基本的文法概念に対する意味的規定」「第 7 章　主語の意味的規定」「第 8 章　節構造」「第 9 章　認知文法と CxG，RCG」「第 10 章　第 2 期認知文法」「第 11 章　認知文法の分析の具体例：主体性と参照点の観点から」「第

12 章　認知文法の談話の扱い」，第二部に「第 13 章　はじめに」「第 14 章　構文文法の展開」「第 15 章　構文文法の発展と修正」「第 16 章　フレーム意味論とフレームネット」「第 17 章　構文文法の射程の拡がり」「第 18 章　構文文法理論の他の潮流」「第 19 章　まとめと展望」が収められている。末尾に「参考文献」「索引」「著者紹介」を付す。（阿久澤弘陽）

（2020 年 11 月 28 日発行　開拓社刊　A5 判横組み　296 頁　定価 4,070 円　ISBN 978-4-7589-1413-0）

宗正佳啓著『普遍文法と言語差異』

本書は，普遍文法（狭域統語論）はすべての言語で同じであり，共時的・通時的差異は狭域統語論から転出された形態・統語構成物が感覚運動系のインターフェイスに至るまでの分散形態論で形成されるものに還元されると仮定した上で，共時的・通時的差異をカートグラフィーに基づく文構造，ミニマリスト・プログラムの素性に基づく統語理論，および最適性理論に基づく制約の相互作用と階層差によって捉えることを目指す。言語多様性の中の統一性を説明するより良い理論を提案することも目的としている。

構成は次のとおり。「はじめに」「第 1 章　枠組み」「第 2 章　主要部移動の言語差異」「第 3 章　That・痕跡効果再考」「第 4 章　素性の浸透」「第 5 章　主節現象と空演算子」「第 6 章　MoodP」「第 7 章　右周辺部の MoodP」「第 8 章　係り結びの消失」「第 9 章　結論」。末尾に「参考文献」「結論」を付す。（阿久澤弘陽）

（2020 年 11 月 28 日発行　開拓社刊　A5 判横組み　272 頁　定価 4,180 円　ISBN 978-4-7589-2292-0）

青木博史・小柳智一・吉田永弘編『日本語文法史研究 5』

隔年刊行の論文集『日本語文法史研究』の第 5 巻。研究論文 10 編，テーマ解説 1 編，書評 1 編を収めている。

構成は次のとおり。「はしがき」「「動詞終止形＋ト」を前件とし後件に引用動詞を持たない文の位置づけについて（吉井健）」「上代におけるミ語法と「動詞終止形＋ト」節の構文構造（勝又隆）」「上代語の従属節，主文連体形・已然形節における主語標示――ガ，ノ，無助詞における意味的，統語的な制限の検討――（竹内史郎）」「述部内部の係り結び――連体形ニアリに係助詞が介入する場合――（近藤要司）」「中古の「らむ」――体系変化と用法――（仁科明）」「中古語における連体助詞的な複合辞「といふ」の諸用法（辻本桜介）」「短単位 N-gram からみた『虎明本狂言集』と『天草版平家物語』の表現の特徴（渡辺由貴）」「近世期における受身文の東西差（山口響史）」「「動詞連用形＋動詞」から「動詞連用形＋テ＋動詞」へ――「補助動詞」の歴史・再考――（青木博史）」「機能語の資材――昇格機能語化と複合機能語化――（小柳智一）」「【テーマ解説】モダリティ（高山善行）」「【文法史の名著】小林賢次著『日本語条件表現史の研究』（吉田永弘）」。「日本語文法史研究文献目録 2018–2019」「索引」「執筆者紹介」を巻末に付す。（阿久澤弘陽）

（2020 年 11 月 30 日発行　ひつじ書房刊　A5 判横組み　303 頁　定価 4,400 円　ISBN 978-4-8234-1046-8）

本間洋一著『日本漢文学文藪――資料と考説――』

本書は日本漢文学に関わる資料と江戸期の作品・人物についての著者の論考をまとめたものである。

本書は「資料篇」「考説篇」「目録篇」の 3 部からなる。「資料篇」の「『本朝小序集』本文翻刻・付記」「『童蒙綴詞抄』について――本文と略注――」はいずれも本文翻刻・校訂が初めて行われたものであり，「『本朝世説』の基礎的研究と本文」には本文翻刻と詳細な出典調査を提示する。「考説篇」は「『文字集略』抜書――逸文の蒐集をめぐって――」「『史館茗話』とその周辺――『続本朝通鑑』とのことなど――」「林読耕斎の漢詩覚書――王朝文人詩とのことなど――」「夭折の文人――林梅洞覚書――」からなり，阮孝緒についての解説，また林読耕斎，林梅洞というこれまであまり取り上げられることがなかった江戸期文人の略伝を所収し，彼らの漢詩世界と先行する平安朝の漢文学との関わりを明らかにしている。「目録篇」は，中江藤樹門下で，後に伊藤東涯の学統に師事した滋賀県高島市（現在）の儒家中村家に伝存する図書の目録と同家の家系譜「中村家近江国高島郡五番領村蔵書目録と家系譜」からなり，巻末に「あとがき」を付す。（前田直子）

（2020 年 12 月 8 日発行，和泉書院刊，A5 判縦組み　255 頁　定価 7,700 円　ISBN 978-4-7576-0977-8）

山田敏弘著『国語を教えるときに役立つ基礎知識 88』

国語教育に関する各種指針の改訂や日本語にまつわる様々な研究成果は，日々の多忙さに追われている現場の先生方には，我々が思っている以上に，届いていない。このような状況を改善すべく，現場で教える際に必要となる最新の 88 の知識を，Q&A 形式でわかりやすく解説している。

「はじめに」「本書の使い方」に続き，「一般」（「国語科は，日本語を教える教科ですか。」「「日本（語）」は，「にっぽん（ご）」が正式な呼び方ですか。」など 10 テーマ）「語彙・意味」（「「道」と「道路」，「あす」と「みょうにち」は，同じ意味ですか。」「「暑い」の対義語は，「寒い」だけですか。」など 10 テーマ）「発音」（「日本語の「ウ」の発音は，英語と同じく唇を丸めますか。」「ガ行音を鼻にかけて発音する鼻濁音は，使った方がいいですか。」など 10 テーマ）「文字・表記」（「助詞の「を」「は」「へ」を，「お」「わ」「え」と書いてもいいですか。」「「稲妻」に振り仮名を打つ際には，「いなづま」と書いてもよいですか。」など 20 テーマ）「文法」（「日本語に主語はありますか。」「日本語には，決まった語順がありませんか。」など 10 テーマ）「文章・談話」（「過去を述べる文章では，「た」を使わないと文法的に間違いですか。」「日本語では，頻繁に，主語のない文を使いますか。」など 10 テーマ）「敬語・待遇表現」（「敬語は，日本語だけにありますか。」「小学生でも，すべての敬語を使いこなすことが必要ですか。」など 10 テーマ）「方言・外国語」（「方言は，東京の言葉がなまったものですか。」「沖縄の言葉やアイヌ語は，

日本語の方言ですか。」など 8 テーマ）を収録。巻末に「おわりに」「索引」を付す。（田中佑）

（2020 年 12 月 9 日発行　くろしお出版刊　A5 判横組み　192 頁　定価 1,650 円　ISBN 978-4-87424-848-5）

西口光一著『第二言語教育のためのことば学――人文・社会科学から読み解く対話論的な言語観――』

本書は，学習者が新しい言語を習得することを総合的・組織的に支援する営みが第二言語教育であると考え，それを探求・考究することを第二言語教育のためのことば学と呼び，そのことば学をバフチンの言語観をもとに確立しようとするものである。各章末にそれぞれの章のテーマについてさらに研究を深めるための文献案内が付されている。

構成は次のとおり。「はじめに」「プロローグ」「第 1 章　ラングの言語観から当事者視点の言語観へ」「第 2 章　ヴィゴツキーの精神への社会文化的アプローチ」「第 3 章　異言語話者の接触場面における言語的活動は言語的相互行為か」「第 4 章　語ることをわたしたちの生態環境に位置づける――異言語話者接触研究のための発話の生態心理学序説――」「第 5 章　言語教育におけるナラティブ主義とヴィゴツキーとバフチン」「第 6 章　人間学とことば学として知識社会学を読み解く――第二言語教育のためのことば学の基礎として――」「第 7 章　そのモノ、多面的につき、取り扱い注意！――第二言語教育にとっての言語論的転回の意味――」「第 8 章　世界内存在とことば――第二言語教育における実存論的転回に向けて――」「エピローグ」「おわりに」。末尾に「参考文献」「人名検索」「事項索引」を付す。（阿久澤弘陽）

（2020 年 12 月 15 日発行　福村出版刊　A5 判横組み　220 頁　定価 2,640 円　ISBN 978-4-571-10191-5）

半沢康・新井小枝子編『実践方言学講座　第 1 巻　社会の活性化と方言』

本書は，現代社会に役立ち現代人の生活を潤すような方言学である「実践方言学」の世界を初めて総合的に紹介する講座の第 1 巻。社会生活をより豊かなものにするための方言の活用法を取り扱い，現代社会と方言とのかかわりについて，経済活動，地域・自治体・放送・芸術活動をキーワードに，それぞれの方言活用の事例を取り上げる。社会生活の中に見られるさまざまな方言活用の事例を取り上げ，その現況と課題を考究する。

構成は次のとおり。「まえがき――新たな方言学の誕生――」「豊かな社会生活のために――第 1 巻への招待――」に続き，「現代社会と方言」（第 1 章から第 4 章）「芸術・放送と方言」（第 5 章から第 9 章）「地域づくりと方言」（第 10 章から第 12 章）の三つのまとまりからなる。「第 1 章　地域経済のための方言活用（渡邉潤爾）」「第 2 章　メッセージの中の方言活用（田中宣廣）」「第 3 章　キャラデザインにおける方言活用（日高水穂）」「第 4 章　IT 社会の中の方言活用（中西太郎）」「第 5 章　映像メディアにおける方言活用（田中ゆかり）」「第 6 章　舞台芸術における方言活用（鳥谷善史）」「第 7 章　バラエティ番組における方言活用（松本修）」「第 8 章　放送番組における方言活用（塩田雄大）」「第 9 章　博物館に

おける方言活用（新井小枝子）」「第 10 章　方言を介した大学と自治体との協働（新井小枝子）」「第 11 章　地方自治体による方言活用と地域づくり（岸江信介・柚木脇大輔・鶴田健介・清水勇吉）」「第 12 章　方言を活用した市民団体の取り組み（今村かほる）」。末尾に「索引」「執筆者紹介」を付す。（阿久澤弘陽）

（2020 年 12 月 15 日発行　くろしお出版刊　A5 判横組み　298 頁　定価 4,730 円　ISBN 978-4-87424-845-4）

大野眞男・杉本妙子編『実践方言学講座　第 2 巻　方言の教育と継承』

本書は，現代社会に役立ち現代人の生活を潤すような方言学である「実践方言学」の世界を初めて総合的に紹介する講座の第 2 巻。地域文化の多様性を支えてきた地域方言を次世代継承に向けて活性化していくために，「学校教育の領域で方言継承に向けて何ができるか」「社会教育・生涯学習の領域で方言継承に向けて何ができるか」「方言を学ぶ際に使用する学習材をどのように作成するか」を考究する。

構成は次のとおり。「まえがき――新たな方言学の誕生――」「地域文化の多様性を守るために――第 2 巻への招待――」に続き，「学校教育と方言」（第 1 章から第 5 章）「地域社会と方言」（第 6 章から第 9 章）「方言の教材・学習材づくり」（第 10 章から第 13 章）の三つのまとまりからなる。「第 1 章　学校教育における方言学習の可能性（大野眞男・杉本妙子）」「第 2 章　小中学校での方言教育の実践と課題（児玉忠）」「第 3 章　ふるさとのことばを学ぶ被災地での授業実践（小林初夫）「第 4 章　高等学校での方言教育の実践と課題（札埜和男）」「第 5 章　大学での方言教育の実践と課題（佐藤髙司）」「第 6 章　生涯学習における方言の役割（加藤和夫）」「第 7 章　方言継承と昔話の語りの活動（杉本妙子・今村かほる・竹田晃子・小島聡子）」「第 8 章　地域のことばによる演劇活動（山浦玄嗣）」「第 9 章　地域の行政との連携による方言継承支援活動（三樹陽介・茂手木清・金田章宏）」「第 10 章　方言教科書のつくり方（山田敏弘）」「第 11 章　地域の暮らしを継承するための方言教科書（菊秀史）」「第 12 章　沖縄県の「しまくとぅば」教育と多様な学習材（中本謙）」「第 13 章　継承の基盤としての方言会話の記録（小林隆・内間早俊・坂喜美佳・佐藤亜実・小原雄次郎・櫛引祐希子）」。末尾に「索引」「執筆者紹介」を付す。（阿久澤弘陽）

（2020 年 12 月 15 日発行　くろしお出版刊　A5 判横組み　326 頁　定価 4,730 円　ISBN 978-4-87424-846-1）

小林隆・今村かほる編『実践方言学講座　第 3 巻　人間を支える方言』

本書は，現代社会に役立ち現代人の生活を潤すような方言学である「実践方言学」の世界を初めて総合的に紹介する講座の第 3 巻。社会の変化に呼応して必要性が増したよりよきコミュニケーションに貢献する方言学を目指し，「福祉社会において方言がもたらす障害と効用」「災害の発生に伴い方言に生じるさまざまな問題」「国際化する社会の中での外国人と方言との関係」を考究する。

構成は次のとおり。「まえがき――新たな方言学の誕生――」「よりよきコミュニケーション

のために――第3巻への招待――」に続き，「福祉と方言」（第1章から第4章）「災害と方言」（第5章から第9章）「国際化と方言」（第10章から第12章）の三つのまとまりからなる。「第1章　福祉社会と方言（友定賢治）」「第2章　医療における方言の課題（岩城裕之）」「第3章　介護における方言の課題（今村かほる・岩城裕之）」「第4章　司法・行政における方言の課題（札埜和男）」「第5章　災害と方言をめぐる課題と指針（津田智史・小林隆）」「第6章　災害時における研究者間の連携（二階堂整）」「第7章　支援者向け方言パンフレットの作成（村上敬一）」「第8章　仮設住宅における方言支援活動（櫛引祐希子）」「第9章　災害からの復興期における行政と方言研究者の連携（半沢康・本多真史）」「第10章　日本語教育における方言の課題（後藤典子）」「第11章　外国人医療・介護従事者と方言（中島祥子・今村かほる）」「第12章　言語サービスの国際比較（武田拓・岩城裕之）」。末尾に「索引」「執筆者紹介」を付す。（阿久澤弘陽）

（2020年12月15日発行　くろしお出版刊　A5判横組み　290頁　定価4,730円　ISBN 978-4-87424-847-8）

青木博史・高山善行編『日本語文法史キーワード事典』

様々な研究が蓄積され，分野を超えた連携や研究方法の深化も進む一方で，細分化・専門化により全体像が見えにくくなってきている日本語文法史。本書はこのような状況における道標として編まれたキーワード集である。気鋭の研究者41名が77のキーワードを簡明に解説している。

構成は以下のとおり。「はじめに」「キーワード」「用例出典」「索引」「編者・執筆者一覧」。（田中佑）

（2020年12月17日発行　ひつじ書房刊　四六判横組み　164頁　定価2,200円　ISBN 978-4-89476-966-3）

八木沢敬著『はじめての言語哲学』

言語哲学の入門書。読者との対話形式で読みやすく書かれており，言語学や日本語文法，哲学の予備知識もいらず，また，随所に設けられた「問いかけ」という練習問題によって積極的に読み進めることができるよう構成されている。

構成は以下のとおり。「はじめに」「第1章　意味とは何だろう――思考の表現としての言語――」「第2章　「アリストテレス」とは何を指すのか――固有名詞――」「第3章　キケロとトゥリウス――固有名と記述――」「第4章　日本の大統領――確定記述――」「第5章　トラとサイコロはどうちがう？――普通名詞――」「第6章　さまざまな「ある」――存在と述定――」「第7章　そんなこといってない？――言語コミュニケーション――」「第8章　言葉でできること――言語と行為――」。巻末に「「問いかけ」の答え」「参考文献」「あとがき」「索引」を付す。（田中佑）

（2020年12月17日発行　岩波書店刊　四六判横組み　202頁　定価2,420円　ISBN 978-4-00-061445-0）

庄司博史監修，福永由佳編『顕在化する多言語社会日本――多言語状況の的確な把握と理解のために――』

本書は，日本社会で急速に展開する「多言語化」と，その結果として生じている「多言語状況」において，拡大しつつある研究領域の多様性を確認し，これからの展開への可能性と方向性を考察する論文集である。2018 年 3 月に開催されたシンポジウム「顕在化する多言語社会日本」での論考を核に新たに 3 名の研究者が加わり，幅広い論考が収められている。

構成は次のとおり。「まえがき（福永由佳）」に続き，総論，各論，展望から構成される。「第 I 部　総論」（「第 1 章　多言語状況をとらえなおす――特に多言語環境概念検証の枠組みから――（庄司博史）」「第 2 章　国家のマルチリンガリズムを記述するための概念的フレームワークについて（ジョン・C・マーハ）」「第 3 章 「多言語社会」の語り方（安田敏朗）」「第 4 章　多文化共生と「多」言語共生時代――メトロリンガリズムの視点からの社会統合の内実――（尾辻恵美）」）「第 II 部　各論」（「第 1 章　日本における英語との「関わり」――余暇活動・自己成長・忍耐力の指標――（田嶋美砂子）」「第 2 章　多言語化する日本人に関する一考察――在日パキスタン人コミュニティの日本人家族成員のデータ分析をもとに――（福永由佳）」「第 3 章　サハリン帰国者の若い世代の顕在化する多言語使用とエスニック・アイデンティティの多重性（パイチャゼ・スヴェトラナ）」「第 4 章　ブラジル人集住地における住民の多国籍化・多言語化――群馬県大泉町の事例を中心に――（拝野寿美子）」「第 5 章　法廷通訳と異文化コミュニケーション――正確な通訳と異文化を訳すこと――（吉田理加）」）。末尾に「展望にかえて（庄司博史）」「執筆者紹介」を付す。（阿久澤弘陽）

（2020 年 12 月 20 日発行　三元社刊　A5 判横組み　238 頁　定価 4,015 円　ISBN 978-4-88303-521-2）

定延利之編『発話の権利』

本書は，編者が伝達型コミュニケーション観の限界を論じる際に持ち出してきた「発話の権利」という現象をめぐる論文集である。発話の権利がどのような現象でありどこから生じるものであるのかという核心に迫るべく，コミュニケーション論の研究者がそれぞれの研究領域において「発話の権利」に関連する事象を論じている。

構成は次のとおり。「序論――この論文集ができたわけ――（定延利之）」「ヒト以外の動物に「権利」はあるか（中村美知夫）」「バカ語話者にみられる発話の借用――「発話の権利」は普遍なのか――（園田浩司・木村大治）「再現行為とコ系指示語の「いま」性――自身の再現を指し示す権利――（細馬宏通）「自分に属することを話す権利の主張と交渉――会話分析の視点から――（串田秀也）「ビジネスミーティングにみられるユーモアから発話の権利を考える（村田和代）」「維持されるものとしての発話の権利――クライアントの意向を尊重もしくは利用する――（高梨克也）」「「発話の権利」とはどういう現象か（定延利之）」。末尾に「あとがき」「索引」「編者・執筆者紹介」を付す。（阿久澤弘陽）

（2020 年 12 月 21 日発行　ひつじ書房刊　A5 判横組み　244 頁　定価 3,190 円　ISBN 978-4-89476-983-0）

鍋島弘治朗著『認知言語学の大冒険』

本書は，研究者に焦点を当てながら認知言語学を概説するものである。従来の意味観・統語観と認知言語学の比較と，認知言語学の理論間のリンクについても章が割かれている。各節の終わりには設問が，第 4 章から第 11 章の各章の終わりにはメトニミーが理解できない AI ロボットメトロン君の漫画が付されている。

構成は次のとおり。「まえがき」「第 1 章　プロローグ　ゴキブリを美女に変身させる」「第 2 章　従来の意味観と認知言語学」「第 3 章　従来の統語観と認知言語学」「第 4 章　認知言語学の歴史（1）　ジョージ・レイコフとマーク・ジョンソン」「第 5 章　認知言語学の歴史（2）　チャールズ・フィルモア」「第 6 章　認知言語学の歴史（3）　レン・タルミー」「第 7 章　認知言語学の歴史（4）　ロン・ラネカー」「第 8 章　認知言語学の歴史（5）　ジル・フォコニエ」「第 9 章　認知言語学の歴史（6）　アデル・ゴールドバーグ」「第 10 章　認知言語学の理論間のリンク」「第 11 章　認知言語学の理論間のスキーマ」「第 12 章　エピローグ　新しい冒険者のために」。末尾に「参考文献」「問題解答」「索引」を付す。（阿久澤弘陽）

（2020 年 12 月 21 日発行　開拓社刊　A5 判横組み　340 頁　定価 3,740 円　ISBN 978-4-7589-2285-2）

中山俊秀・大谷直輝編『認知言語学と談話機能言語学の有機的接点――用法基盤モデルに基づく新展開――』

本書は，認知言語学と談話機能言語学の共通点と相違点を明らかにし，その間に学際的な交流のきっかけを作ること，および，人間の言語を実際の使用に基づいて探求するというアプローチの可能性と展望を示すことを目的として編まれたものである。

「前書き（中山俊秀）」に続き，「第Ⅰ部　経験基盤の言語学のフレームワーク」に「第 1 章　用法基盤モデルの言語観（大谷直輝・中山俊秀）」「第 2 章　認知言語学と談話機能言語学（大谷直輝・中山俊秀）」を，「第Ⅱ部　ケーススタディ〈理論研究編〉」に「第 3 章　言語知識はどのような形をしているか――個人文法の多重性と統合性――（岩崎勝一）」「第 4 章　言語知識はどのように習得されるか（佐治伸郎）」「第 5 章　言語知識はどのように運用されるか――「得る」ための知識から「使う」ための知識へ――（吉川正人）」を，「第Ⅲ部　ケーススタディ〈個別研究編〉」に「第 6 章　構文と談話のパートナーシップ――日本語の名詞修飾節構文からの考察――（松本善子）」「第 7 章　日本語の日常会話における「基本的」他動詞節――現実的な文法理論の構築を目指して――（大野剛・サドラー美澄・第十早織）」「第 8 章　新表現の創発――新しくない中にめっちゃ新しさ見えてるアピール――（鈴木亮子）」「第 9 章　子供の言語の文法的生産性を探る――第一言語習得における日本語の動詞屈折について――（巽智子）」「第 10 章　*Wh* 分裂文と進行形の歴史的発達と融合について――情報連鎖の再構築と対人関係機能――

（柴﨑礼士郎）」「第 11 章　会話のなかのタガログ語文末助詞 e（長屋尚典）」「第 12 章　隣接した発話間に見られる文法的構造の萌芽――子どもによる前置詞 in の使用を例にして――（堀内ふみ野）」「第 13 章　言語使用のダイナミクスと用法基盤モデル――アルタ語の文法，相互行為，文化からみる位置保持詞の役割――（木本幸憲）」「第 14 章　幼児の「語り」における丁寧体の使用と絵本の文体が与える影響について（田村敏広）」を収録。巻末に「後書き（大谷直輝）」「索引」「編者・執筆者紹介」を付す。（田中佑）

（2020 年 12 月 25 日発行　ひつじ書房刊　A5 判横組み　408 頁　定価 4,950 円　ISBN 978-4-89476-995-3）

工藤力男著『葭の髄からのぞく日本語』

本書は，成城大学紀要『成城文藝』における連載「辞苑閑話」をまとめたものであり，『かなしき日本語』（笠間書院，2009 年）『日本語に関する十二章――詫びる？詫びない？日本人――』（和泉書院，2012 年）に続く著者 3 冊目の日本語をめぐるエッセイ集である。

構成は以下のとおり。「凡例」「壱の章　ヨリ三態」「弐の章　一兵卒」「参の章　嘆きか願いか疑いか」「発言Ⅰ――絆――」「肆の章　陳述のゆくえ」「伍の章　さまよえる「憂い」」「陸の章　複合動詞の森」「発言Ⅱ――里山――」「漆の章　概数表現くさぐさ」「捌の章　文語は遠くなりにけり」「玖の章　ケネディとガウディ」「発言Ⅲ――障がい者――」「拾の章　類義動詞管見」「拾壱の章　ジーヴスとジーヴズ」「拾弐の章　まで・までに」「あとがき」。（田中佑）

（2020 年 12 月 27 日発行　和泉書院刊　四六判縦組み　200 頁　定価 1,430 円　ISBN 978-4-7576-0982-2）

村中淑子著『関西方言における待遇表現の諸相』

本書は，関西方言（大阪市と京都市を含めた関西中央部の方言）における待遇表現のうち，助動詞類（助詞と助動詞が組み合わさった形を含む）の考察をとおして，小説を用いた方言研究の手法を洗練させていくべきこと，待遇表現に関わる方言の複合形の研究を進展させていくべきことの 2 点を主張しようとするものである。2020 年度桃山学院大学学術出版助成を受けて刊行された。

「第 1 部　待遇表現研究のための視点」に「第 1 章　はじめに：本書の目的と構成」「第 2 章　小説を用いた方言研究手法について」「第 3 章　複合形研究の必要性について」「第 4 章　待遇表現の捉え方を再考する」を，「第 2 部　小説にみる待遇の助動詞――単独形の研究――」に「第 5 章　京都における待遇の助動詞類」「第 6 章　大阪におけるテ敬語」「第 7 章　大阪の待遇の助動詞ヤルについて」「第 8 章　大阪における罵りの助動詞類」「第 9 章　大阪方言におけるナサル・ナハル・ハル等の変遷――小説資料と落語資料の違い――」「第 10 章　小説を使った待遇表現研究について」を，「第 3 部　デスマス転訛形について――複合形の研究――」に「第 11 章　「デスマス転訛形」とは」「第 12 章　デスマス転訛形の発生について」「第 13 章　現代におけるデスマス転訛形――インタビュー調査から――」「第

14 章　大阪市談話資料におけるデスマス転訛形」「第 15 章　国会会議録資料におけるデスマス転訛形」「第 16 章　小説にみるデスマス転訛形　その 1 ――織田作之助作品――」「第 17 章　小説にみるデスマス転訛形　その 2 ――田辺聖子作品――」「第 18 章　デスマス転訛形研究の意義」を，「第 4 部　関西方言における待遇表現研究の基盤と未来」に「第 19 章　待遇表現研究と「ことばの調整」という捉え方の提案」を収録。巻末に「参考文献一覧」「初出一覧」「索引（語彙・人名・事項）」「あとがき」を付す。（田中佑）

（2020 年 12 月 27 日発行　和泉書院刊　A5 判横組み　320 頁　定価 8,250 円　ISBN 978-4-7576-0979-2）

籾山洋介著『実例で学ぶ認知意味論』

認知言語学の 1 分野である認知意味論の主要テーマについて解説した概説書。大学の講義でも使用できるよう，28 章で構成されている。

「はしがき」「本書の表記について」に続き，「第 1 章　導入：認知意味論の基本的な考え方」「第 2 章　プロトタイプカテゴリー」「第 3 章　同じ物事に対する異なる捉え方」「第 4 章　焦点化の違いに基づく表現」「第 5 章　視点の違いに基づく表現」「第 6 章　主体化」「第 7 章　時間の捉え方」「第 8 章　百科事典的意味（1）：百科事典的意味とは／指示対象の特徴」「第 9 章　百科事典的意味（2）：指示対象に対する他者の関与」「第 10 章　百科事典的意味（3）：フレームに基づく類義語の意味の違い」「第 11 章　百科事典的意味（4）：典型例」「第 12 章　百科事典的意味（5）：顕著例・理想例」「第 13 章　百科事典的意味（6）：ステレオタイプ（1）」「第 14 章　百科事典的意味（7）：ステレオタイプ（2）」「第 15 章　メタファー」「第 16 章　メトニミー」「第 17 章　シネクドキー」「第 18 章　比喩に基づく婉曲表現の仕組み」「第 19 章　多義語（1）：多義語とは――多義語の多様性――」「第 20 章　多義語（2）：典型的な多義語」「第 21 章　多義語（3）：単義語寄りの多義語」「第 22 章　多義語（4）：同音異義語寄りの多義語」「第 23 章　多義語（5）：多義語のプロトタイプ的意味（1）」「第 24 章　多義語（6）：多義語のプロトタイプ的意味（2）」「第 25 章　多義語（7）：メトニミーおよびフレームに基づく多義語」「第 26 章　多義語（8）：多義構造――統合モデル――」「第 27 章　もじりの認知意味論（1）」「第 28 章　もじりの認知意味論（2）」を収録。巻末に「あとがき」「索引」を付す。（田中佑）

（2020 年 12 月 28 日発行　研究社刊　A5 判横組み　232 頁　定価 2,200 円　ISBN 978-4-327-37824-0）

肖江楽著『『英和対訳袖珍辞書』の研究』

近代日本初の本格的な英和辞書である『英和対訳袖珍辞書』について「辞書の成立」「訳語の改良」「新たな見出し語の増加と削除」「訳語の漂流」「近代新漢語」の 5 つの観点から考察を行っている。

構成は以下のとおり。「序章　近代日本初の本格的な英和辞書『英和対訳袖珍辞書』」「第 1 章　原稿から刊行へ」「第 2 章　初版の刊行」「第 3 章　再版原稿から刊行へ」「第

4 章　初版と再版との比較」「第 5 章　第 3 版――『改正増補和訳英辞書』――」「第 6 章　第 4 版――『大正増補和訳英辞林』――」「第 7 章　『英和対訳袖珍辞書』の周辺資料」「第 8 章　研究回顧と課題」。巻末に「参考文献」「初出一覧」「あとがき」「索引凡例」「人名索引」「書名索引」「語彙索引」を付す。

なお，本書は著者が 2018 年度に立教大学大学院文学研究科に提出した博士論文をもとにしたものである。（田中佑）

（2021 年 1 月 20 日発行　武蔵野書院刊　A5 判横組み　290 頁　定価 11,000 円　ISBN 978-4-8386-0740-2）

川添愛著『ふだん使いの言語学――「ことばの基礎力」を鍛えるヒント――』

理論言語学やその周辺分野のうち，日常生活に関係がありそうな項目を取り上げ，ことばの基礎力を鍛えるためのヒントを提供する。言語に関する無意識の知識の紹介から，言葉の簡単な分析方法，言葉が問題となる日常の場面への応用まで，日常的な言語使用例を用いて理論言語学のエッセンスを伝える。

構成は次のとおり。「まえがき」「第一章　無意識の知識を眺める：意味編」「第二章　無意識の知識を眺める：文法編」「第三章　言葉を分析する」「第四章　普段の言葉を振り返る」。末尾に「あとがき」「註」「参考文献一覧」を付す。（阿久澤弘陽）

（2021 年 1 月 25 日発行　新潮社刊　四六判縦組み　236 頁　定価 1,595 円　ISBN 978-4-10-603862-4）

椎名美智著『「させていただく」の語用論――人はなぜ使いたくなるのか――』

「させていただく症状群」という言い方がされるほど使用が拡大している「させていただく」。ほどよい丁寧さを感じ何度も使用する人がいる一方で，慇懃無礼な感じや違和感を覚える人がいるこの表現の謎を解くのが，本書の目的である。

構成は以下のとおり。「はじめに」「第 1 章　イントロダクション――「させていただく」という問題系と歴史社会語用論的アプローチ――」「第 2 章　先行研究のレビューと分析の方向性――「させていただく」の問題系とは何か？――」「第 3 章　質問紙による意識調査――「させていただく」の「文法化」と「新丁重語」の誕生――」「第 4 章　「させていただく」の前接部と後接部――2 つのコーパス・データの調査結果――」「第 5 章　2 つの調査結果の考察―ベネファクティブ「させていただく」使用拡大の要因と影響――」「おわりに」。巻末に「参考文献」「付録」「索引」を付す。

なお，本書は著者が 2019 年 3 月に放送大学に提出した博士論文『「させていただく」という問題系――歴史社会語用論的調査と考察――』に加筆・修正を加えたものである（田中佑）

（2021 年 1 月 28 日発行　ひつじ書房刊　A5 判横組み　304 頁　定価 3,960 円　ISBN 978-4-8234-1056-7）

嶋田珠巳・鍛治広真編著『時間と言語』

本書は，言語学，哲学，神経科学の研究者たちによる，「時間と言語」を大きなテーマとした研究を集めた論文集である。多くの章が時間に関する言語表現に焦点を当てて

いる。日本語にとどまらず様々な言語が扱われており，時間に関する文法と語彙の諸問題がさまざまな側面から論じられている。

構成は次のとおり。「まえがき」「第 1 章 「時間と言語」に関する基礎的考察（嶋田珠巳）」「第 2 章 時間の流れの科学――患者さんの内観からわかること――（河村満・越智隆太・花塚優貴・二村明徳・緑川晶）」「第 3 章 日本語時間名詞の構造（田窪行則）」「第 4 章 中国語時間詞の空間性――〈過去〉と〈未来〉の空間メタファー――（木村英樹）」「第 5 章 指示と時間――トルコ語の指示詞 şu を手がかりとして――（林徹）」「第 6 章 エピソード記憶と言語――タイプからトークンへ――（青山拓央）」「第 7 章 形而上学的時間論の一方法論としての言語と理論――メタ形而上学的観点から――（小山虎）」「第 8 章 演算子の作用域から見た日本語の時制解釈（中村ちどり）」「第 9 章 理由節構文の曖昧性と時間順序（西山佑司）」「第 10 章 因果関係と時間――「原因」「結果」を主名詞とする連体修飾節を中心に――（有田節子）」「第 11 章 選択体系機能理論の観点から見た英語の時制――ハリデーの解釈とマティスンの細密化――（越智綾子）」「第 12 章 時間の言語的意味のコーパス化――日本語テンス・アスペクト表現理解過程解明に向けて――（吉本啓）」「第 13 章 ティンリン語のテンスとアスペクト、時間表現（大角翠）」「第 14 章 時間語彙の対照研究――時間語彙類型論にむけて――（鍛治広真・佐々木文彦・嶋田珠巳）」。末尾に「あとがき」「主要索引」「執筆者一覧」を付す。（阿久澤弘陽）

（2021 年 1 月 30 日発行 三省堂刊 A5 判横組み 304 頁 定価 4,180 円 ISBN 978-4-385-36510-7）

田坂憲二著『源氏物語と平安時代文学――第二部・第三部編――』

本書は，慶應義塾大学の通信教育部のテキストとして作成された『国文学古典研究 III――源氏物語と平安時代文学――』の続編であり，『源氏物語』第二部第三部のうち，物語の流れを理解するために不可欠な二十箇所の原文を掲載している。『源氏物語』の重要な巻及び代表的な箇所を味読・通読することによって，日本文学全般を代表する『源氏物語』の理解を深めることを目的としている。また，『源氏物語』の原文一箇所に対して，関連のある文学作品や歌人たちを取り上げることで，『源氏物語』以外の平安時代の文学作品についても十分な知識を得てその作品世界を感得することを目指している。

構成は次のとおり。「はじめに」に続く二部構成。「第二部」には「一 若菜上巻（一）と『伊勢物語』『古今和歌集』」「二 若菜上巻（二）と継子いじめの物語」「三 若菜下巻（一）と『堤中納言物語』」「四 若菜下巻（二）と『狭衣物語』」「五 柏木巻と『大鏡』」「六 横笛巻と『蒙求』」「七 鈴虫巻と紫式部の祖父藤原雅正」「八 夕霧巻と『竹取物語』」「九 御法巻と僧正遍昭の哀傷歌」「十 幻巻と『後撰和歌集』」が，「第三部」には「十一 匂宮巻と『うつほ物語』」「十二 橋姫巻と和歌の引用」「十三 椎本巻と『和漢朗詠集』」「十四 総角巻と『伊勢集』」「十五 早蕨巻と『拾遺和歌集』」「十六 宿木巻と小野小町・在原業平」「十七 東屋巻と『和泉式部日記』」「十八 浮舟巻と『大和物語』」「十九 蜻蛉巻と『浜松中納言物語』」「二十 手習巻と『枕草子』」「番外 夢

浮橋巻と『長恨歌』」が収められている。末尾に参考資料として，「『国文学古典研究 III ――源氏物語と平安時代文学――』内容一覧」を付す。（阿久澤弘陽）

（2021 年 1 月 30 日発行　和泉書院刊　A5 判縦組み　96 頁　定価 880 円　ISBN 978-4-7576-0981-5）

川野靖子著『壁塗り代換をはじめとする格体制の交替現象の研究――位置変化と状態変化の類型交替――』

本書は，「壁塗り代換」をはじめとする格体制の交替現象を研究対象とするものである。具体的には，「～ニ～ヲ形」と「～ヲ～デ形」／「～カラ～ヲ形」と「～ヲ形」の交替である 2 つの「壁塗り代換」と，筆者が「餅くるみ交替」「満ち欠け代換」と呼ぶ交替現象（全 4 種類）を扱い，交替の成立条件と原理，交替現象の体系的記述，格体制の交替現象の文法的位置づけを明らかにする。

構成は次のとおり。「序章　本書の目的と概要」「第 1 章　付着移入型壁塗り代換――「壁にペンキを塗る」「壁をペンキで塗る」――」「第 2 章　餅くるみ交替――「桜の葉に餅をくるむ」「餅を桜の葉でくるむ」――」「第 3 章　交替動詞と非交替動詞の間」「第 4 章　離脱型壁塗り代換――「グラスから水を空ける」「グラスを空ける」――」「第 5 章　満ち欠け代換――「彼には積極性が欠けている」「彼は積極性に欠けている」――」「第 6 章　位置変化動詞文と状態変化動詞文の交替現象の全体像と体系――第1章～第5章のまとめに代えて――」「第7章　「意味類型の階層モデル」の特徴と有効性――英語の locative alternation 研究の枠組みとの比較から――」「第 8 章　なぜ壁塗り代換はヴォイスのカテゴリーに入らないのか」「第 9 章　交替動詞と多義語の違い」「終章　本書のまとめ」「付章 1　位置変化動詞文における格成分の語順」「付章 2　壁塗り代換に関する疑問に対して――本書の立場と見解――」。末尾に「参考文献」「既発表論文との関係」「謝辞」「事項索引」「語彙索引」を付す。（阿久澤弘陽）

（2021 年 2 月 1 日発行　ひつじ書房刊　A5 判横組み　296 頁　定価 6,380 円　ISBN 978-4-8234-1062-8）

築島裕著『古代日本語発掘』

本書は，現在の市場に出回らず入手困難となっている歴史的な良書を精選し刊行するシリーズ「読みなおす日本史」の 1 冊として発行された。原本は 1970 年に学生社から刊行された『古代日本語発掘――古点本の謎をさぐる――』である。本書は，訓点資料研究における著者の足跡，古代日本語研究の方法論，研究成果，研究史などが一般向けに書かれたもので，思い出深い訪書旅行，大切な人との出会い，思いがけない資料の発見などのエピソードの中に，日本語史上の重大な発見の一端がさりげなく記されている。

本書の構成は次のとおりである。「古代の日本語――「はしがき」にかえて――」「一　古点本の謎」「二　足で発掘する古代日本語」「三　資料の海」「四　一冊の本を求めて」「五　古代語発掘の旅はつづく」「六　念願の『大般若経音義』を追う」「七　高山寺の冬の旅」「八　経箱に詰っていたもの」「九　屏風の下張りにあった古経巻」「一〇　ついに完成

した古点本の解読」「一一　仮名の祖先をさぐる」「一二　奇妙な片仮名」「一三　濁音符の起源をたどる」「古点本関係の主要文献」を収録。巻末には上記一から一二の概要が解説された「『古代日本語発掘』を読む（沖森卓也）」がある。（前田直子）

（2021 年 2 月 1 日発行　吉川弘文館刊　四六判縦組み　191 頁　定価 2,420 円　ISBN 974-4-642-07149-9）

文昶允著『日本語における短縮外来語の形成とその仕組み』

本書は，日本語の複合外来語に由来する短縮語形成のメカニズムとそれを制御する要因を論じている。短縮現象に影響する音韻的要因に加え，短縮語形の選択における言語運用者の選好傾向について探求することを目的に，実例のデータベースをもとにした記述的アプローチおよび実験的アプローチを用いる。著者が 2018 年 12 月に筑波大学大学院人文社会科学研究科に提出した博士論文『複合外来語に由来する短縮語の形成メカニズムに関する研究』に加筆修正が施されたものである。

構成は次のとおり。「第 1 章　序章」「第 2 章　言語研究における短縮語研究の位置づけ」「第 3 章　第一要素に長音を含む複合外来語と短縮型」「第 4 章　短縮型の決定に影響する音節構造」「第 5 章　短縮型の決定に影響する OCP」「第 6 章　短縮語の形成方法に観察される世代差」「第 7 章　終章」。末尾に「参考文献」「付録」「あとがき」「索引」を付す。（阿久澤弘陽）

（2021 年 2 月 5 日発行　ひつじ書房刊　A5 判横組み　164 頁　定価 5,500 円　ISBN 978-4-8234-1061-1）

園田博文著『台湾の日本語教科書と中国語会話書の研究――昭和 20 年まで――』

本書は，日本語学，日本語教育学の分野における資料研究と多様な日本語の分析に新知見をもたらすことを目的に，台湾における日本語教科書と日本語資料に焦点を当てた日本語の分析，日清韓会話書・台湾語会話書の成立と中国語方言会話書への展開及び中国語会話書（北京官話会話書）の成立と展開についての議論を行うものである。台湾における日本語教科書に関わる第 1 部，台湾語会話書に関わる第 2 部，中国語会話書の研究である第 3 部から本論が構成されており，第 2 部と第 3 部は，筆者が 2018 年に東北大学大学院文学研究科に提出した博士学位請求論文『中国語会話書から見た近代日本語の研究』がもとになっている。

構成は次のとおり。「まえがき」「凡例」「序章」「第 1 部　台湾における日本語教科書と日本語資料」（「第 1 章　台湾における日本語教育・国語教育の概観（明治 28 年～昭和 20 年）」「第 2 章　国語普及の三大雑誌『国光』『黎明』『薫風』（昭和 7 年創刊）の日本語」「第 3 章　『国光』における投稿文の資料性――誤用と誤文訂正を中心に――」「第 4 章　『新国語教本教授書』における仮名導入前の日本語指導について」「第 5 章　『教授細目』「男子教材」「女子教材」から見た規範としての女性語」「第 6 章　『教授細目』『指導細案』から見た台湾における日本語の発音指導」）「第 2 部　日清韓会話書・台湾語会話書の成立と中国語方言会話書への展開」（「第

1 章　日清韓会話書における指定丁寧表現・形容詞丁寧表現」「第 2 章　明治初年日本語会話書における指定丁寧表現・形容詞丁寧表現――日清韓会話書との比較――」「第 3 章　『日清会話』と『日韓会話』の成立過程に関する考察」「第 4 章　台湾語会話書の成立――植物語彙を中心に――」「第 5 章　台湾語会話書の展開と広東語会話書・海南語会話書への発展」）「第 3 部　中国語会話書（北京官話会話書）の成立と展開」（「第 1 章　中国語教育史についての概観」「第 2 章　明治前期の中国語会話書」「第 3 章　日本語資料としての『官話指南総訳』（明治 38 年刊）」「第 4 章　日本語資料としての『東語士商叢談便覧』（明治 38 年刊）と文求堂主人田中慶太郎」「第 5 章　『北京官話談論新篇』と総訳本 2 種（明治 43 年刊，昭和 8 年刊）」「第 6 章　『官話急就篇』『急就篇』と総訳本 4 種（大正 5，6，13 年刊，昭和 9 年刊）の日本語」「第 7 章　『官話急就篇』『急就篇』訳述書の質問表現」「第 8 章　中国語会話書における当為表現の特徴」「第 9 章　『官話急就篇』総訳本 4 種における当為表現」「第 10 章　当為表現の直訳度および『東語士商叢談便覧』における当為表現」）「終章」。末尾に「中国語会話書一覧」「参考文献」「あとがき」「索引」「参考資料」を付す。（阿久澤弘陽）

（2021 年 2 月 12 日発行　武蔵野書院刊　A5 判横組み　402 頁　定価 11,000 円　ISBN 978-4-8386-0742-6）

斎藤達哉著『国語仮名表記史の研究』

本書は，仮名主体で表記された古典日本語の文章である「仮名資料」について，「仮名資料の文字調査」「語と用字との関係」「字体認識と書写態度」の 3 つの観点から調査・研究するものである。令和 2 年度日本学術振興会科学研究費補助金「研究成果公開促進費（学術図書）」の助成を受けて刊行された。

「はじめに――本書の概要――」「Introduction: Overview of this Book」に続き，「第 1 部　国語仮名表記史の研究――目的・用語・資料・方法――」「第 2 部　仮名資料の文字調査」（「第 1 章　仮名資料の文字調査――「花散里」67 伝本の数的調査――」「第 2 章　「漢字含有率」と「仮名字種数」から分かること――「花散里」61 写本の分類から――」「第 3 章　文字調査に基づく『源氏物語』伝本の分類――「花散里」の分類実例――」「第 4 章　文字調査に基づく専修大学蔵為秀本「桐壺」の位置」「第 5 章　「漢字含有率」「仮名字種数」と「改行位置」――二つの正徹本『源氏物語』の関係――」）『第 3 部　語と用字』（「第 1 章　ハの仮名の用字傾向――米国議会図書館蔵『源氏物語』の場合――」「第 2 章　語の表記に使用される仮名字種の「偏り」と「揺れ」――「ケハヒ」と「カタハライタシ」の用字――」「第 3 章　ハの仮名字種から分かること――『足利本仮名書き法華経』の場合――」「第 4 章　仮名写本に使用される漢字字種――『足利本仮名書き法華経』の場合――」「第 5 章　仮名写本に使用される漢字字体の変形――漢字「候」の省略字体――」）「第 4 部　字体認識・書写態度の展開」（「第 1 章　『悦目抄』類の「位置による仮名の使い分け」――仮名字体の誤認の拡大――」「第 2 章　明治期の書写態度――麦生本『源氏物語』の転写本から――」「第 3 章　明治期の字体認識――第一号表と『仮名字類集』の「いろはがな」――」「第 4 章　傍記から訳文へ――『新編紫史』と『源氏物語評釈』――」）を収録。巻末に「初出一覧」「あとがき」「索引」を付す。（田中佑）

（2021 年 2 月 16 日発行　武蔵野書院刊　A5 判横組み　420 頁　定価 13,200 円　ISBN 978-4-8386-0741-9）

近藤明日子著『コーパスと近代日本語書き言葉の一人称代名詞の研究』

本書は，近代雑誌コーパスを用いて明治・大正期の日本語書き言葉における一人称代名詞の体系と通時的変化を考察することを目的としたものである。令和 2 年度日本学術振興会科学研究費補助金「研究成果公開促進費」の助成を受けて刊行された。

構成は以下のとおり。「序」「Ⅰ　本研究で使用したコーパスと研究方法」（「第 1 章　近代雑誌コーパスの設計」「第 2 章　一人称代名詞と使用場面属性の抽出・分類」「第 3 章　言語量から見る近代雑誌コーパスの資料特性」）「Ⅱ　近代書き言葉の一人称代名詞」（「第 4 章　『明六雑誌』の一人称代名詞」「第 5 章　『東洋学芸雑誌』の一人称代名詞」「第 6 章　『国民之友』の一人称代名詞」「第 7 章　『太陽』の文語体書き言葉の一人称代名詞」「第 8 章　明治・大正期の文語体書き言葉における一人称代名詞の通時的変化」「第 9 章　『太陽』の口語体書き言葉の一人称代名詞」）「Ⅲ　近代話し言葉の一人称代名詞」（「第 10 章　『太陽』の口語体会話文の一人称代名詞」）「Ⅳ　女性雑誌の一人称代名詞」（「第 11 章　女性雑誌の書き言葉の一人称代名詞」「第 12 章　女性雑誌の口語体会話文の一人称代名詞」）「結」。巻末に「参考文献・参考 URL」「本書と既発表研究との関係」「謝辞」「索引」を付す。

なお，本書は著者が 2019 年 3 月に東京大学に提出した博士論文「明治・大正期の日本語書き言葉における一人称名詞の研究――近代雑誌コーパスを資料とした計量的分析――」に加筆・修正を加えたものである。（田中佑）

（2021 年 2 月 20 日発行　勉誠出版刊　A5 判横組み　400 頁　定価 9,350 円　ISBN 978-4-585-28052-1）

岡田一祐著『近代平仮名体系の成立――明治期読本と平仮名字体意識――』

本書は，小学校令施行規則第十六条と附表第一号表における仮名の再定義を近代平仮名体系の成立と捉え，それを可能とした諸事実を内的・外的の両面から探り，平仮名体系成立の背景にある「仮名字体意識」を論じるものである。著者が 2014 年度に北海道大学大学院文学研究科に提出した博士論文をもとに，加筆・改稿・再構成の上出版された。

構成は次のとおり。「第一部　はじめに」（「第一章　明治期読本の平仮名字体意識の諸問題」「第二章　いろは仮名の来しかた――近世・近代における平仮名字体の体系化――」）「第二部　近世の仮名字体意識の諸問題」（「第三章　江戸期のいろは仮名」「第四章　教科書に用いる仮名字体――往来物における濁音仮名から見えるもの――」）「第三部　明治期読本における平仮名字体意識の形成と変容」（「第五章　明治期のいろは仮名」「第六章　明治検定期以前の読本の仮名字体」「第七章　異体仮名表の形と字体」「第八章　いろはならざる画一化のゆくえ――「かなのくわい」の画一化試案――」）「第四部　小学校令施行規則第一号表にいたるまで」（「第九章　明治検定期読本における字体の画一化過程」「第十章　小学校令施行規則第一号表を読みなお

す」「第十一章　例に示す仮名とじっさいに用いる仮名の一致について」「第十二章　「いろは」から「平仮名」へ」）「第五部　おわりに」（「第十三章　議論の整理と今後の展望」）「補論　平仮名字体記述法の批判的検討」。巻末に「附録　調査した読本と異体仮名導入」「参照文献」「後記」「索引」を付す。（阿久澤弘陽）

（2021 年 2 月 28 日発行　文学通信刊　A5 判縦組み　368 頁　定価 7,700 円　ISBN 978-4-909658-48-7）

尾山慎著『上代日本語表記論の構想』

本書は，著者が前著『二合仮名の研究』（和泉書院，2019 年）の執筆を通じて得た，上代の日本語表記論はいかに可能か，それを通して何が知られるかという点に関する構想を，種々の案を提示しながら述べていくものである。実際の用例群から観察されること，帰納されることを主眼とした前著に対する理論編として位置付けられる。

「緒言」「本書の構成と概要」に続き，「序章」「第 1 章　表記論における諸問題」「第 2 章　漢字の「表意」と「表語」」「第 3 章　「歌」表記論の構想」「第 4 章　上代「漢語」研究の構想」「第 5 章　「歌」との対比で見る上代「散文」表記論の構想」「補章　内田賢徳・乾善彦編『万葉仮名と平仮名 その連続・不連続』を読む」「終章」を収録。巻末に「初出一覧」「あとがき」「事項・人名　索引」を付す。（田中佑）

（2021 年 2 月 28 日発行　花鳥社　A5 判横組み　356 頁　定価 9,900 円　ISBN 978-4-909832-30-6）

窪薗晴夫著『一般言語学から見た日本語のプロソディー――鹿児島方言を中心に――』

本書は，日本語のプロソディーについて，著者の母方言である鹿児島方言を中心に据え，一般言語学・言語類型論の視点からまとめたものである。アクセントを主たる対象とした 3 つの章と，イントネーションを対象とした第 4 章の 4 章構成。

「まえがき」「第 1 章　類型論的観点から見た日本語のプロソディー」「第 2 章　アクセントと音節構造」「第 3 章　アクセントの変化」「第 4 章　文のプロソディー」。各章末に「補遺」，巻末に「参照文献」「索引」「英文要旨」を付す。（田中佑）

（2021 年 3 月 17 日発行　くろしお出版刊　A5 判横組み　380 頁　定価 5,940 円　ISBN 978-4-87424-854-6）